

患者さまの心に寄り添い、支援できる言語聴覚士へ。充実した学習環境の中、現場レベルの知識と技術を習得。

医療心理学科

言語聴覚専攻

取得可能な資格

言語聴覚士(国)受験資格、社会福祉主事任用資格

特長

医療心理学科における専攻間の連携や医学・心理分野の共通科目で心理学に強い言語聴覚士を育成します。



幅広い心理学系の講義

医療心理学をはじめ、様々な心理系の科目も受講でき、心理学に強い言語聴覚士として成長。患者さまの気持ちを理解し、相手の立場になって考える力が養えます。



現場経験豊富な教員

本専攻の教員はすべて現場経験者。現場で出会った患者さまの事例や医療現場での話などリアルな体験談を聞くことで実践的に学ぶことができます。



国家試験対策講座

4年次からは言語聴覚士の国家資格取得に向けて対策講座を開講。国家試験合格に向けてしっかりと学習サポートを行います。



学外実習に加え、学内実習でも 培う豊富な実践経験

大学内には実習先以外にも言語聴覚士の仕事内容を間近で学べる専門機関「ことばときえの発達支援センター」が設置されています。言葉の発達や聞こえの問題をかかえた子どもとご家族の相談を受け付け、専門教員の指導のもと学生が主体となり、子どもたちの検査・訓練などの援助、ご家族に対する養育支援、就学前児のグループ指導、聴覚スクリーニングなどを実施。自らの経験を通じて、実際の現場での働きや求められる専門的な知識や技術を養うことができます。



福祉・介護 × 保育・教育 × 心理 × 医療・リハビリ

つながる、ひろがる、チーム支援の学び。



学校法人 薫英学園

大阪人間科学大学

人間科学部

●社会福祉学科 ●医療福祉学科[介護福祉専攻／視能訓練専攻] ●子ども保育学科
●健康心理学科 ●医療心理学科[臨床発達心理専攻／言語聴覚専攻] ●理学療法学科

入試広報センター TEL.06-6318-2020 | 〒566-8501 大阪府摂津市正雀1-4-1 | <https://www.ohs.ac.jp/>



時間割で見る対人援助のプロを目指す4年間

言語聴覚士



資格取得と就職だけを目的にしない、

言語聴覚士として活躍するために本当に必要な「価値ある能力」の獲得。

派手な教育ではないけれど、「成長に本気」な4年間が大阪人間科学大学にあります。

プロフェッショナルを目指すみなさんにお届けする

言語聴覚士になった一人の学生の軌跡。

ぜひご覧ください。



成長に、本気。

大阪人間科学大学

成長は、本物。



学生 × 教員

4 年次生

五十嵐 千花 さん

医療心理学科 言語聴覚専攻 2016年3月卒業
取得資格：言語聴覚士
就職：社会福祉法人三ヶ山学園 いずみ診療所
大阪府立刀根山高校出身

医療関係の仕事に興味を持っていた私は、進路研究をしていた高校3年のときに言語聴覚士という仕事を知りました。「話す」、「聞く」などのコミュニケーションや「食べる」ことの障がいに対応する言語聴覚士の仕事内容を知っていくうちに、私自身が小さい頃うまく話せず言葉の教室に通っていたことを思い出しました。自分の体験や記憶と言語聴覚士の仕事内容が結びついたとき、悩んでいる子どもやご家族の支えになりたいという強い気持ちが湧いてきて、言語聴覚士を目指す決心をしました。

大学の授業では「言語発達障害学」が印象に残っていて、子どもの身体と言語の発達、障がい児の身体と言語の発達や特徴、検査・訓練方法などを学びました。この授業と先生の個別指導のおかげで、臨床実習等で担当させていただいた子どもたちにとって、何が困難なのか、どのような検査や訓練を行ったらいいのかを言語聴覚士として理解し考えることが出来るようになったと思います。授業以外では、ボランティアに力を入れて取り組みました。障がい児施設や難聴児施設で子どもやご家族とかかわりをもたせていただく中で、コミュニケーションの取り方や手話など様々なことを学びました。また、大学内にある「ことばときえの発達支援センター」でも、先生の指導のもと言葉の発達がゆるやかな子どもとご家族の相談や支援の経験を積むことができました。

正直なところ入学して実際に学ぶまでは、言語聴覚士がここまで医療職だとは思っていませんでしたが、臨床実習など多くの学びの中で感じたやりがいは、入学前に持っていたイメージや期待以上だったと感じています。大学では、身体の構造や病気に関する知識以外にも社会福祉や心理に関することなど覚えることがたくさんありますので、これから言語聴覚士を目指すみなさんは入学前から日常的に勉強する習慣を身に付けておいた方がいいと思います。私は春から小児専門の医療施設に就職します。同じ障がい名でも様々な子どもがいますので、一人ひとりにあった療育ができるように、何が困難なのか、何が得意なのかなどを理解して、子どもやご家族に接していきたいと思っています。



教員

宮地 ゆうじ 助教

所属：医療心理学科 言語聴覚専攻
担当科目：言語発達学、言語発達障害学
専門分野：言語発達学・言語発達障害学
保有資格：言語聴覚士

五十嵐さんは、入学当初より「言語聴覚士になる！」という明確な目標があり、その目標を達成するために計画的な学生生活を送っていました。例えば、大学の講義とは別に、聴覚障害児の通園施設でボランティアを行ったり、大学附属の発達支援センターにおいて実習を行うなど、自ら学びの場を求め様々な経験を積んできました。これらの経験が、彼女の成長につながったのではないかと思います。そして、彼女の成長したところを一つ挙げるとすれば、「対人援助者としての姿勢”でしょう。言葉が話せない子どもや障がいのあるお年寄り、自分の思いや困っていることを自ら語ることができません。患者さま一人ひとりのニーズや問題点を理解するためには、言葉にならない声に目を向ける必要があります。五十嵐さんは、粘り強く患者さまと向き合い、また様々なアセスメント（評価）技術を用いて、支援の糸口を見つけることがとても上手くなりました。今後さらにアセスメント技術に磨きをかけ、患者さまの言葉にならない声に応えることができる支援者になってもらいたいと願っています。

大学のキャッチコピーである「成長に、本気。」は、言語聴覚専攻の教育方針でもあります。教員は学生の主体的な学びを応援するために、講義以外にも様々な形で学びのサポートを行っています。実習対策や少人数指導はもちろん、大学附属の発達支援センターや教員が紹介する施設への見学実習、幼稚園児の聴力検査など、実際に自分で学んだことをチャレンジする機会を数多く設けていることが本専攻の特長です。そして、4年後、「言語聴覚士の資格取得」という本当の意味での結果を得るために、2年次生から国家試験対策講座を実施し、合格率100%を本気で目指しています。言語障がいや正しく理解し、治療技術を身に付けるためには、大脳生理学的なヒトの仕組みを基礎から勉強しなくてははいけません。これは、とても難しい勉強です。しかし、専門的な知識や技術を身に付けるということは、将来社会で活躍するための武器になります。言語聴覚士を目指すみなさんは、ぜひ、この難しい課題に挑戦し、他者とは異なる自分だけの専門知識や技術を本専攻で身に付けてください。

五十嵐さんの時間割 132単位修得見込み(卒業要件単位数124単位)

医療職の基盤をつくる。医学の基礎知識とコミュニケーションスキルや職業倫理の獲得。

◎1年次(前期)

	月	火	水	木	金	土
1	臨床医学Ⅲ (臨床神経学)	臨床医学Ⅰ (内科学・小児科学・精神医学)	FA演習Ⅰ		人間科学概論	
2	心理学概論	法学	人間関係	オールワーク ジョブ* (中国語)	基礎医学Ⅰ (医学総論・病理学)	
3			スポーツ 実技Ⅰ		心の科学	
4	社会福祉Ⅰ					
5						

◎1年次(後期)

	月	火	水	木	金	土
1	言語聴覚障害学	FA演習Ⅱ	社会問題論		臨床医学Ⅴ (形成外科学)	
2	心理学研究法	基礎医学Ⅱ (解剖学・生理学)	臨床医学Ⅳ (耳鼻咽喉科学)	オールワーク ジョブ* (英語)Ⅱ		
3	生物学	臨床医学Ⅱ (リハビリテーション医学)	スポーツ 実技Ⅰ	人権と倫理	医療心理学	
4		教育心理学	聴覚医学			
5						

臨床に必要な専門知識・技術を学ぶ。障がいに応じた検査・訓練を繰り返し練習する。

◎2年次(前期)

	月	火	水	木	金	土
1	プレ演習Ⅰ	言語心理学				
2	言語発達障害学Ⅰ	発達心理学	嚥下障害Ⅰ		言語発達学	
3		臨床歯科医学・ 口腔外科学	音声学		聴覚障害学Ⅰ	
4		臨床歯科医学・ 口腔外科学	オールワーク ジョブ* (フランス語)		心理測定法	
5			生活と統計			

◎2年次(後期)

	月	火	水	木	金	土
1	プレ演習Ⅱ		嚥下障害Ⅱ	言語学	音声障害	
2					臨床心理学	
3	言語聴覚障害診断学			音響学		
4				コミュニケーション (中国語)	言語発達障害学Ⅱ	
5					聴覚障害学Ⅱ	

臨床の場で実践。医療スタッフや患者さまとの交流を通じて、人間性の醸成を目指す。

◎3年次(前期)

	月	火	水	木	金	土
1			聴覚障害学Ⅳ	聴力検査法		
2	高次脳機能障害学		医療心理学演習Ⅰ	補聴器・人工内耳		
3	失語症Ⅰ		言語発達障害学Ⅲ			
4	失語症Ⅱ				構音障害	
5	聴覚障害学Ⅲ				吃音	

◎3年次(後期)

	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3			医療心理学演習Ⅰ			
4						
5						

対応力や臨床的問題解決能力を身に付ける。2月実施の国家試験の合格に向けて対策を進める。

◎4年次(前期)

	月	火	水	木	金	土
1		医療心理学演習Ⅱ				
2						
3						
4						
5						

学外実習やゼミ（医療心理学演習Ⅱ）以外の時間は、
すべて国家試験対策の勉強をしていました。

◎4年次(後期)

	月	火	水	木	金	土
1		医療心理学演習Ⅱ				
2						
3						
4						
5						



STUDENT'S
VOICE

身体や脳の構造をはじめ、医学分野の専門的な勉強がかなり多くありました。進級後に控えているより専門的な授業を理解するために基盤となる知識を得るものが多かったので、授業終わりに先生に質問や相談をして、不明点は都度解決することを心掛けました。

言語発達の仕組みや言語聴覚士が支援対象とする障がいの内容及び検査方法など、専門科目を多く学びました。この年次から一気に難易度が上がった印象があり、授業中にすべてを理解するのは難しく、普段はもとより定期試験前も友達と勉強を教え合いました。

後期から学外実習が始まることもあり、授業は臨床の現場で使う検査や訓練方法などが中心でした。小児の医療施設での実習では、臨床場面での言語聴覚士の仕事を見学、また実際に利用者さんを担当させて頂き、言語聴覚士になるという思いが強くなりました。

2回目の学外実習は、成人を対象とした医療機関へ。前年の経験も踏まえて、小児との違いや高齢者とのかわり方を学ばせて頂きました。実習が終わってからは、卒業前にある国家試験合格のために、大学での試験対策講座と自学自習。日夜を問わず勉強しました。